

ヨーロッパ大学史におけるタルト大学の位置と役割

セルゲイ・イサコフ
橋本伸也・訳

現在、世界には多数の大学がある。これらの大学はきわめて多様であつて、二、三万名もの学生が学ぶ巨大大学もあれば、学生数わずか数百名という小規模なものもある。まず第一に、地域に「奉仕」する大学もあれば、世界中から学生を引きつけている大学もある。古くからの学問的伝統をもつた由緒ある名だたる大学もあれば、あまり知られていなくて、何らかの伝統の形成に未だ成功していない若い大学もある。

大半の大学は独自の特徴をもっている。この点では、大学は人間と似ている。それぞれに自分の顔があるのである。そして、その相貌がことのほかくつきりとしていてユニークであり、他の大学とそれほど似たところもなく、まさにそのことで耳目を集める大学も存在する。私が卒業し、そして働いている大学であるタルト大学（元ドルパト大学、ユリエフ大学）はまさにそうした例だと私は思う。

一点ばかり、ことのついでに指摘しておこう。エストニアでは、ほとんどすべての地理上の名称、特に都市名には三つ（場合によっては四つも）の異名がある。エストニア語、ドイツ語、ロシア語である。例えば、タルト（これはエストニア語の呼称）はドイツ語ではドルパトとなり、ロシア語ではデルプト（ドイツ語のドルパトに由来する）ないしユリエフ（いにしへのルーシの都市名）である。タルト大学、ドルパト大学（あるいはデルプト大学）、ユリエフ大学といくつもの大学の呼称があるのはこのためである。どの呼称を使用するかは、地域の権力を有する地位に誰がついているかで決まることほとんどだつた。

タルト大学の独自性の根っこは過去、つまりその歴史の中にある。この大学は、実にふつうの「子ども」ではない。誕生日を複数もち、一度ならず名前と教授言語を変えてきたのである。

ここで、大学の創立記念日の変転ぶりについて思い起こさずにはおれない。私が学生であつた一九五二年には、大学一五〇周年記念がおごそかに語られた。一九八二年、このときすでに私は教授になつていたのだが、これに劣らぬおごそかに三五〇周年が語られた（ということは私は、聖書に出てくるメトセラ〔訳注・旧約聖書で九六九年生きたとされる〕なみに、二〇〇年以上生きたことになる）。一九八九年に私は、実際はずつと控えめであつたとはいへ、

大学七〇周年を祝った。ここでもまたもや、その瞬間に最高権力が何を強調しているのか、このことによつて多くが決められた。

だが、いずれにせよ、タルト大学を性格づけ、最終的にはその歴史と化した多くの特徴は、それでもなお何か独自の、独特の異彩を放つものを生み出して、それは今も大学の外貌に現れている。人間がその足跡を残さずに消えることがないのと同様、過去が跡形なく消えてしまうことは決してありえないだろう。およそいつであれ、過去からはなにかが生活の中に残されて、後統世代がすでに別世界に旅立つたときでさえ、彼らのなかに息づいているものなのだ。

ヨーロッパ大学史全般について二言、三言。このタイプの学問的な高等教育機関がヨーロッパに登場したのは一三世紀から一四世紀のことである。それを特徴づけるのは「多機能性」であつて、一つ屋根の下で行われる多くの専門や多くの学問上のディシプリンの講義、学位（バカラリウス、マギストル、リツェンツィア、ドクトル）授与権、そして権力からの相対的独立と学問の自由、一定の自治である。大学が最初に登場したのは、経済的・社会的・文化的にもつとも発展した西欧諸国——北イタリア、フランス、イギリス、スペイン——であつた。最古と考えられているのはポローニヤ（イタリア）、ケンブリッジ（イギリス）、パリ（ソルボンヌ、フランス）、サラマンカ（スペイン）といった大学である。一四世紀になると、中央ヨーロッパ諸国（今日ではその一部は東ヨーロッパに当たる）にも生まれ、一三四八年にはブラハ（今日のチェコ）、一三六四年にはクラコフ（ポーランド）、一三六五年にはウィーン（オーストリア）に大学が作られている。一五世紀には、バルト海地域にも大学が登場する（北ドイツ、ロストックの大学）。現在の「プリバルティカ」＝バルト海沿岸地域は当時のヨーロッパ的文化世界のもつとも東方の辺境に当たるが、ここでは大学創設のための土壌はいまだ整っていなかった。

ここで私は、または日本人聴講者向けに少しばかり説明しておかなくてはならない。「プリバルティカ」＝バルト海沿岸地域（バルト諸国）という概念は「バルト海諸国」という概念とは一致しておらず、歴史的に変化してきた

ものである。今日、「プリバルティカ」という概念が含むのはエストニア、ラトヴィア、リトアニアであるが、一九一八年まではこれを構成するのはエストニア、ラトヴィアだけであった。これは歴史的にはリヴォニアと言いつ、後に、帝国のオストゼー諸県（つまり、バルト海を指すドイツ語の「オストゼー」に由来する）としてロシア帝国に併合された地域である。リトアニアの歴史的發展は、ラトヴィア、エストニアの歴史的發展とはまったく異なる道をたどった。リトアニアはつねにポーランド、カトリックともつとも緊密な関係にあり、中央ヨーロッパ文化圏に入っていたのである。しかるに、エストニア・ラトヴィアはドイツやドイツ人、プロテスタンティズムと歴史的つながりを持ち、北欧文化圏に入っていた。

さて、大学が、宗教的教説とならんで、その時代にもつとも行き渡つた文化類型である学問の水準を反映するのは、当然のことである。一五〜一六世紀のヨーロッパ大学にはルネサンス的な人文主義思想がかなりの影響を及ぼしていた。それは、大学の教育課程中に人文的学芸を設けるよう促すものであった。一六世紀から一七世紀の大学生活に多大の影響力を有したのは宗教改革であり、それに続く対抗宗教改革、カトリックとプロテスタントとの闘争であった。カトリックとプロテスタントへの大学の分裂が始まった。

だが、プリバルティカに戻ることとしよう。一七世紀前半になってやつとここでも、大学開設を可能とし、それどころか好適な歴史的条件が整った。一七世紀初頭、多年にわたる血で血を洗う戦争の結果、リヴォニア——当時、プリバルティカはこう呼ばれた——の大半はスウェーデン王国の一部となった。当時のスウェーデンは北欧の大国の一つであり、カトリックとの闘争のなかではプロテスタントの庇護者であった。スウェーデンの権力者たちは、最近獲得した地域の教育發展や、権力者のめざす政治を実行してプロテスタンティズム（正確には、その一派であるルター派）の原理を定着させるのに必要な能力を有した役人や牧師の養成に関心を抱いていた。一六三二年、スウェーデン国王グスタフ二世アドルフはドルバト（タルト）ギムナジウムを大学に改組する勅書に署名した。リヴォニア領内で最初のこの新しい高等教育機関は一六三二年一〇月一五日に開設され、その創設者を領えて、アカデミア・グスタヴィ

アナという名称を得た。

この新大学は当時のヨーロッパ大学をモデルとして形作られていた。四つの伝統的学部、すなわち神学部、法学部、医学部、哲学部を有した。そこでの授業は、当時一般に行われていた通り、ラテン語で行われた。アカデミア・グスタヴィアナには、自治を保証したスウェーデンのウプサラ大学学則が適用された。教授（その数は一〇名ないし一三名で変動した）の大半はドイツ人であった。アカデミア・グスタヴィアナは、その存立期間中（一六三二—一六五六年）に一〇一六名の学生を数えたが、主としてスウェーデン人ないしドイツ人であり、なかには他国出身もいた。学生中にはラトヴィア人が一人（ヤニス・レイティエルス）いたことが知られているが、エストニア人は一人もいなかった。これは驚くようなことではない。エストニア人は農奴であったのにたいして、当時のプリバルティカの支配的身分——貴族・聖職者・市民——はドイツ人と、まれにスウェーデン人からなっていた。

アカデミア・グスタヴィアナの運命は容易ならざるものであった。一六五六年には、ロシアースウェーデン戦争開戦のあおりで、大学は、事実上、存在を停止してしまったのである。

一六九〇年、スウェーデン政府はタルトに大学を復興することを決定した。復興された大学は先達との継承性を示すとともに、当時のスウェーデン国王カール一二世を領えて、アカデミア・グスタヴォーカローリーナと称されるようになった。この大学はしめて二〇年間存続して、当初、一六九九年まではタルトに、その後一七一〇年まではエストニア西部の海岸沿いの都市パルヌにあったが、ここに大学が移転させられたのは、ロシアとの次なる戦争が差し迫っていたためであった。アカデミア・グスタヴォーカローリーナは、その活動成果ははるかに慎ましいものだったとはいえ、先達と同じ道をたどった。一七一〇年、パルヌはいわゆる北方戦争時にロシア軍部隊に占領され、大学は最終的に閉ざされ、教授たちはスウェーデンに立ち去った。

一八世紀、プリバルティカがロシア帝国の一部に編入されると大学復興の試みが幾度となくなされたが、それらはいずれもうまくいかなかった。

一七世紀から一八世紀初頭のタルトとパルヌの大学は、この時期に北欧、スウェーデン王国に作られた三つの大学の一つであった（このほかにスウェーデンのルント大学とフィンランドのオーボ「トゥルク」大学）。学生の大半はリヴォニア、スウェーデン本国、そしてスウェーデン王国の一部たるフィンランド出身の若者であったから、これは狭い一地域の大学ではなく、むしろ全国的な大学であった。だがもちろん、それがもつとも重要な意義を有したのはプリバルティカにとつてであった。この大学は、教授団や学生交流を介してプロテスタントの北ドイツやこの地域の大学に結びついていた。講師陣には当時の著名な学者がおり、大学で学んだ者たちは教育・学問・教会といった分野を含むさまざまな領域でみごとに業績をおさめた。アカデミア・グスタヴィアナとアカデミア・グスタヴォーIIカロリーナで学んだ者のなかには、他の大学（とりわけスウェーデン王国）の教授が多く知られている。まとめるなら、おそらくプリバルティカで最初の大学は典型的なヨーロッパ型大学であつて、実際には平均以上の水準になることはなかつたとはいえ、ある種の独特の特徴がすでにそこに認められるのである。

タルトの大学は、一八〇二年、皇帝アレクサンドル一世の勅命によつて再興された。再興された大学の初代学長ゲオルグ・フリードリヒ・パロットは、ドイツ語を教授言語とするといえ、オストゼー諸県のみならずロシア帝国全体のためのロシアの帝国大学を設けるよう皇帝を説き伏せることに成功した。

ここに、タルト大学史上もつとも輝かしい時期が始まり、これは一九世紀中頃まで続いた。

ここで、ロシア大学史全般について二言、三言述べておかねばなるまい。今日、形式的にロシア帝国最初の大学と広く考えられているのは、一七二六年、創立直後のペテルブルグ科学アカデミーに設けられた、いわゆるアカデミー大学である。またもや純粹に形式的な話になるが、今日のサンクト・ペテルブルグ大学はその「系譜」をここに求めている。とはいえ、一七二六年に設けられたこの大学は、ヨーロッパの古典的大学のさほど彷彿させるものではなかつた。実際には、ロシアの大学教育システムは一七五五年のモスクワ大学創設に始まるのである。一九世紀初頭にいたるまで、この大学は基本的に、巨大なロシア帝国全土で唯一の大学であつた。そして、国家も社会もともに、これ

はまったく不十分で、全国に新大学を設ける必要があることをよく理解していた。デルプト大学（タルト大学）は一連の新たな高等教育機関の最初のものであった。一八〇四年にはカザン、一八〇五年にはハリコフ、そして一八一九年には再度ペテルブルグに大学が開設される（かつてのアカデミー大学は、すでに一七六六年には存在しなくなっていた）。

他大学が大都市に作られたのに対して、タルト大学が住民わずか数千人の小さな郡都に作られたことに注意しておこう。いったいどういう事情があつたのだろうか。その際にまず考慮されたのは、タルトにはかつて大学が存在したという事実である。とはいえ、率直に言つて、アカデミア・グスタヴ・カローリナとデルプト帝国大学には直接の関係は一切認めることはできない。われわれは、アカデミア・グスタヴィアナとアカデミア・グスタヴ・カローリナを今日のタルト大学の「先駆」とみなしているのである。第二に、大都市としてタルトが選ばれたのには、ドイツの経験も影響を与えていた。ドイツでは小都市に大学の設けられるのが一般的だが、その際、学問への思いを逸らせる娯楽の少ない場所の方が学生はよく知識を身につける、と考えられたのである。ドイツの大学はこの頃、ヨーロッパでもっとも価値がありもっとも権威が高かつたということが想起される。

だが、もちろん、他大学とデルプト大学との違いの主たるものは、それが小さな郡都にあつたことにあるわけではない。肝心なのは、これがドイツ語を教授言語とし、ドイツ人の教授団を擁し、ドイツ人学生が優位にあつたという点である（一九世紀前半に学生の五分の四はドイツ人で、そのなかでもまず、すでに指摘したように、地域の特権身分であつたバルト・ドイツ人が多かつた）。

この問題をめぐつては古くから論争がある。一八〇二年に設けられたデルプト大学は、教授言語だけではなくて、その性格上も、またドイツ大学を彷彿とさせるその指向性や構造の点でもドイツ的だとする見方をとる人々が一方にいます。また、そうはいつてもこの大学は、ドイツ語を教授言語とするロシアの帝国大学であつて、ロシアとその必要・要求の方を向き、これらの必要に配慮し、まさしくロシアのために専門家を養成し、ドイツの学界だけでなくロシア

のそれとも結びついていた、と考える人々もいる。近年、ドイツ人研究者のあいだでも後者の観点が支持されるようになってきているが、これは注目に値する（さしあたり、以下を参照。Klaus Meyer “Wie deutsche war die Universität Dorpat?”, 1996）。私は、この見方に立っている。

実際、一九世紀の学生の大半はドイツ人であったが、そうはいつても、一九一八年以前の全時期を通じて、タルト大学には四〇を下らぬ民族の学生が学んだ。その中には少なからぬ数のロシア人、エストニア人、ポーランド人、ラトヴィア人、ユダヤ人、ウクライナ人、アルメニア人、グルジア人、リトアニア人、ベラルーシ人と、ロシア帝国のその他民族の人々がいた。タルト大学で学んだ人々はその後、自民族の文化の名だたる担い手となった。彼らはタルトで知識を得て学問に触れただけではなくて、ここで人格と世界観を形成したのであり、彼らの創作活動もここで始まったのである。タルトでは、学生民族団体も活動していて、そのこともまた、民族文化の発展を促していた。

デルプト・ユリエフ大学で学んだ人々や教授たちがいなければ、ロシアの学問はかなり貧困なものになっていただろう。さしあたり、もつとも偉大なロシアの医学者で、外科学教授であったニコライ・ピロゴフの名前でも想起しておこう。彼は、デルプト大学に学び働いたのである。彼は、外科学における解剖学的・実験的潮流の創始者であり、同時代の野戦外科学の播種期にあつて、固定式石膏ギプスを普及させた一人であった。だが述べておかねばならないのは、個々の学者（その一部については以下でもつと名前を挙げる）だけではなく、もつと広く、ロシア文化全体の発展のなかでタルト大学の果たした役割である。驚嘆すべきほど多面的な人物であり、ロシア語のもつとも完全にしてもつとも有名な辞書の著者であつたヴラジミール・ダーリもタルト大学の教え子で、彼の辞書は今もその意義を保っていて、途切れることなく再刊されている。大学のおかげでデルプトは、すでに一八一〇年代から三〇年代に、ロシア文化の少なからず重要な源となつていたのである。

カフカース、ウラル、シベリア、極東を含むロシアの地理・歴史・植物学・鉱物学の研究において、タルト大学の学者たちはきわめて多大の貢献をした。例えば、レデブル教授は包括的な四巻本の労作である『ロシアの植物』

(一八四二—一八五三年)の著者であったが、これは、この国の植物界の研究に一時代を画するものであった。

エストニア、ラトヴィア、ポーランド、アルメニアの文化と学問の歴史にタルト大学の卒業生や教師たちがもたらした貢献には、ことのほか大きなものがある。タルト大学で教育を受けたエストニア人、ラトヴィア人、ポーランド人その他の傑出した学者や作家、社会活動家や政治家の名前をいちいち挙げて皆さんを煩わせることはいたしません。これらの人々が実際、自民族の学問や文化の歴史のなかで多大の役割を果たした担い手であったということ、この点については私の言葉を信頼していただくようお願いしたい。たとえば、エストニア国民文学の礎を築いた人物で、エストニアの民族叙事詩『カレヴィポエグ』の著者であるフリードリヒ・レインハルト・クロイツヴァルト、あるいは近代アルメニア文学と近代アルメニア文語「アシュハラバル」の創始者であるハチャトウル・アボヴヤンを挙げておこう。ロシア語やアルメニア語によつて創作を行うデルプットの詩人のシュレーも知られている。この大学で学んだラトヴィア人学生のおかげで、タルトは一九世紀中葉にはラトヴィア民族覚醒の中心にもなった、等々といった次第なのである。

こうしたすべてが証明しているのは、デルプット大学はロシアにおけるドイツ人の大学ではなかった、ということである。この大学は、まさしくロシアの帝国大学であり、ロシア帝国に暮らした多くの民族の学問と文化の歴史に重要な役割を果たしたのである。すでにこのことがタルト大学をしてヨーロッパの幾多の大学のなかで独特のものとしていたのであつて、このことに同意していただければと思う。

当然、次のような疑問が起こつてくるであらう。カフカースのような遠方の土地からタルトに若者たちを引きつけたのは一体何だったのか、ということである。あるいは、自分たちの大学があるにもかかわらず、ロシア人やポーランド人が当地に学びに来たのはなぜなのか、ということである。

基本的な理由は、一八二〇年代から五〇年代までのこの大学の学問水準の高さや高い人気、この時期の学問の世界における高い権威である。タルト大学は、この時期、「黄金時代」を迎えていたと言つてもできる。ロシア帝国の

唯一最良の大学ではなかつたにしても、最良の大学の一つだったのである。一八二八年、ここタルト大学に教授学院が開設されたのは偶然ではなかつた。これは、国内全大学の優れた卒業生のなからロシアの高等教育機関のための教授を養成することを使命とした、ユニークな教育機関であつた。注意していただきたいことは、今日の博士課程に似たこの施設がモスクワでもペテルブルグでもなくて、タルト大学に作られたということである。

デルプト大学の高い学問的基礎となつたのは、かなりの程度、その教授言語がドイツ語だつたということである。くどくどと申し上げるわけにはいかないけれども、幾多の歴史的理屈からロシアには自前の学問の担い手が存在しなかつた。しかるに、政治的には細かく分裂して弱小であつたが、文化や学問の方面でたいへん発展していたドイツでは、学者やエリート的なインテリゲンツィアがあり余つていた。デルプト大学は、ドイツ人の若き学徒が活躍する可能性を提供した。まもなく自前の担い手、すなわち自校出身教授たちが登場したとはいへ、一九世紀前半のデルプト大学の教授の大半は民族的にはドイツ人で、ドイツ大学に学んだ人々だったのである（一八二六年から五〇年）すでに、この大学の教師の四八・五パーセントはデルプトを母校とする卒業生たちであつた。

たつた今、名前を濫発することはしないと約束したばかりだが、それでも、一八二〇年代から五〇年代のデルプト大学の学問的水準の高さの最良の証となる、何人かの学者たちの名前を挙げずにいるわけにはいかない。この時期最大の学者には、天文学教授のフリードリヒ・ゲオルク・シュトルーヴェがいる。彼はこの大学の卒業生で、最強の反射望遠鏡（フラウンホーファー反射望遠鏡）を備えた、当時、世界最高の天文台の一つである大学附属天文台長であつた。連星にかんする古典的研究や、恒星への距離を確定する新しい方法はシュトルーヴェによるものである。タルトで働いた後、彼は、ロシアの中核的天文台であるペテルブルグ郊外のブルコヴォ天文台を指導した。科学的発生の学の創始者で、抜群の幅広い学問的関心をもつ百科全書家的自然科学者の最後の学者の一人であつたカール・エルンスト・ベールもタルト大学の卒業生であつた。モーリツ・ヘルマン・ヤコビもしばらくこの大学で働いたことがあつたが、彼は世界最初の実用電動機の発明者であり、電気メッキ法の創始者であつた。イギリスの物理学者ジュールと

もに、「ジュール・レンツの法則」として広く知られた法則の考案者と考えられているエミール・レンツもデルプ
ト大学で学んだ。この法則により、導体中を電流が流れる際に発生する熱量が確定された。彼はまた、電磁誘導の結果
生じる電流を確定する、いわゆる「レンツの法則」を確立した。後にレンツは、ペテルブルグ大学の教授や学長になっ
た。総じて、タルト大学の学窓から一九世紀中に輩出したアカデミー会員や各大学の教授は約二五〇名で、科学アカ
デミー会員一八名、タルト大学の教授七一名、ロシアのその他の大学の教授一〇〇名、外国大学の教授三九名、その
他の高等教育機関教授二一名であつた。一九世紀から二〇世紀初頭のタルト大学の教授たちは、ペテルブルグ科学ア
カデミーの活動にも積極的に関与していた。

タルトの学者たち、とりわけ夭逝した動物学者のヨハン・フリードリヒ・フォン・エッシュホルツがロシア人船
乗りたちの世界一周航海に加わつて、その間に地質・鉱物学的、自然地理学的、植物学的な地球研究に従事してい
たということ、さらに指摘しておこう。タルトの教授たちはそのための特別プログラムを策定した。たとえ
ば、一八二三年から二六年にかけて行われた世界一周航海のために、コッツェブを長としたタルトの学者たちは水
深計や深度計を世界で初めて利用したが、これらはタルトで開発された器具で、海洋学にとつて新機軸のものである。
この太平洋航海時に三つの群島が発見され、うち一つはエッシュホルツ島と命名された。この島は今では哀しいこ
とに、アメリカ人が原水爆実験を行ったマーシャル諸島のビキニ環礁として知られている。

かくして、一九世紀（とりわけその前半）の世界の学問にたいするデルプト大学の貢献には議論の余地がない。に
もかかわらずこの大学は、きわめて小規模の「周縁的」大学（「地方」大学という語を用いるのは望ましくない）であつ
た。学生数も多くはなかつた。一八二〇年には二六二名、一八三〇年に五九二名、一八五三年に七一二名だったので
ある。

比較的小規模な大学が世界の学問に多大の貢献をなした理由として、私見では、さらに一つタルト大学に固有で、
他大学と異なる理由を指摘しておく必要がある。一九世紀のデルプト大学は一方ではドイツ的世界やもつとひろく西

欧的学問と結びついていたが、他方では、ロシアの学問とも結びついていた。この大学は、西欧とロシアとの学問的・文化的接触の媒介者という独特の使命を多くの点で遂行したのである。一八〇二年に再興されたこの大学の初期の教授たちは、すでにこのことを自覚していた。たとえば、歴史学・統計学・地理学教授のペシュマンは、一八〇二年開学時の記念講演のなかで、大学の二つの課題を示していた。すなわち、①ロシアが西欧的文化と学問の成果を摂取する助けとなること、②ロシアの学問・文化・文学の成果を西欧に知らしめること、である。彼の考えでは、デルプト大学は西欧とロシアとの「通路」を切り拓かねばならないのである。タルト大学はこうした役割を、現に、実に成功裏に遂行したのである。

逆に、このことは、デルプト大学のなかで様々の学派や流派の総合をはかるための土壌を生み出すこととなった。しかるに、世界の学問の経験が示しているように、まさしくこうした総合こそが、学問の発展にとってことのほか有益なのである。タルトにはそのための前提条件がすべてそろっていたわけで、この事実こそが、世界標準の学問中心地としての地位をデルプト大学が確立するよう促したのである。

一例を挙げてみよう。化学教授のカール・シュミット（ちなみに彼は、複数の学問分野で大いに成果を上げた多面的な学者である）は、生理学教授のフリードリヒ・ビデルとともに、実験生理学とさらに生化学の分野で名だたるデルプト学派の創始者であった。この学派からは、一九世紀ロシアの生理学や組織学の大学者の一人であるフィリップ・オフシャンニコフを輩出した。彼はデルプト大学卒業生で、のちにまずカザン大学、ついでペテルブルグ大学教授になった。ニコライ・コヴァレフスキーや、後のノーベル賞受賞者で高次神経系生理学研究に従事したイヴァン・パヴロフが、その学問の道を歩み始めたのも、彼の研究室であった。ここには、ビデルとシュミットをはじめとしたデルプト生理学派とオフシャンニコフとコヴァレフスキーのカザン・ペテルブルグ学派、そしてパヴロフ学説との継承関係という、興味深いネットワークがきわめてよく跡づけられる。しかも、こうしたつながりのなからさらに一連の学問上の潮流が枝分かれしていて、それは現代の神経学、神経病理学、そして精神医学の基礎を据えるのに一役買っ

たのである。こうした学問的探究とその成果の連鎖のなかにあつて、タルト大学は名誉ある位置を占めている。この種の事例は、もつと挙げるができる。

かつてタルト大学が高い学問的水準を達成し、しかもロシアの若者のあいだであれほど人気を博したのには、さらにもう一つ、きわめて本質的な理由がある。デルプト・タルトでは、ロシア帝国の他地域と比して、それほど息苦しい雰囲気になかった、つまりここでは、社会的・民族的抑圧体制、すなわち帝国を支配した官僚制がさほど強くその存在を意識させることがなかったのである。様々の民族の人々が異口同音にこのことを認めている。「私のみるところ、当時のデルプトはおのれの人生を生きている独特の国のようなもので、占領され抑圧された私たちの国ポーランドはもとより、ロシア国家全体、さらにはヨーロッパ全体で起こっていることも根っから違つていた」。デルプト大学卒業生で医師のポーランド人教授イグナツィイ・バラノフスキは、自分の回想記のなかでこう書いていた。「リヴオニアのアテネ」——一九世紀にタルトを呼ぶのにこの表現が好んで用いられた——の自由な雰囲気について、この上なく喜ばしい気分ですべて評していたのである。

一八〇三年デルプト大学令により、この大学が他に例を見ない大きな自治権を与えられていたことを考慮しておく必要がある。教授たちは、自分たちのあいだから学長を含む要職者を選任していた。大学は独自の警察をもち、その成員に対する裁判を行つた。大学裁判所の判決を破棄できるのは、セナート「元老院、最高法院」だけであつた。プリバルティカ総督と地方当局は大学に対するいつさいの権限を奪われていた。世界の首座は神、二番目がロシアのツァーリ、そしてそれにすぐ続くのがデルプトの学生だ。この土地の学生は本気で思つてゐる、などというよく知られた学生小咄が生まれたのはこれゆゑである。一九世紀前半には検閲権も大学に集中させられており、プリバルティカの学事のいつさいは大学の指導下に置かれていた。こうしたわけで、大学はロシア帝国領内のある種の自由な共和国と化していたのである。

このような自由な空気と自由な精神はタルト大学に特徴的なものであるが、これは学問が花開くための担保でも

あつた。なぜなら、学問が成功裏に発展するのは精神的抑圧が最小にとどめられていて、学問的論争と討論の可能性が存在する自由な状況のなかだけだからである。

実は、一九世紀後半にデルプト大学は次第にロシアの他大学、とりわけモスクワ大学とペテルブルグ大学から後れを取りはじめて、世界の学問への貢献も小さくなっていった。その活動には、一八五〇年代まではさほど目立たなかつたオストゼーの地域主義的特徴がますます現れてくる。自分たちの特別の権利や特権を守るために中央権力と闘つていたプリバルティカのドイツ人たちが、ますます大きな影響力を大学に及ぼすようになったのである。このため、この大学はロシアの学問から切り離され、同時に、かつての西欧的学問世界とのつながりを必ずしも維持できなくなつていく。それでも、一八六〇年代から八〇年代には優れた学者たちがこの大学で引き続き働いていた。すでにカール・シュミットやフリードリヒ・ビデルの名前は挙げておいた。それに加えて挙げておかなくてはならないのは、一八七五年から八一年にかけてこの大学で働いたヴィルヘルム・オストヴァルトであつて、彼は物理化学の礎を築いた一人で、哲学者でもあり、目下、タルト大学卒業者中で唯一のノーベル賞受賞者でもある。ドイツ時代の最末期のこの大学では、有名な言語学者であるボドウエン・デ・クルテネ教授が講義を行つていたが、彼は、現代言語学の源流に位置している。これらの学者らが、学問中心地タルトの栄光と名声を支えていたのである。

一八八〇年代に帝国権力は、プリバルティカを含む辺境のロシア化政策に乗り出した。大学における教授言語としてのドイツ語と、それと結びついたオストゼーの分離主義はいまや、権力にたいして危惧を抱かせるようになった。一八八九年以降、デルプト大学の改組が始まつた。それは一八九〇年代中頃に完成した。新たにもたらされた主要なこととして、大学の教授言語がロシア語に移行したが、これは当然、大学生活のすべての面で変化を惹起した。ロシア語による講義への切りかえをできないか、あるいはそうすることを希望しないドイツ人教授に代えて、ロシア人の教授と講師が採用された。学生の構成も変化した。ドイツ人学生の数が激減し、その代わりにロシア人の数が増加したが、同時に、エストニア人、ラトヴィア人、ウクライナ人ととりわけユダヤ人学生の数も増えた。ロシア全土で通

用していた一八八四年大学令がデルフト大学にも適用され、これにより自治権が廃止されて、ロシアの全高等教育機関システム中でこの大学の有する特別の地位が消失した。タルトの「母校 *alma mater*」はロシア的な大学になった。

一八九三年にはデルフト大学は正式にユリエフ大学に改称され、そのことよってロシア的な性格が強調された。

ロシア化がこの大学の学問的水準のいちじるしい低下をもたらしたという主張を聞くことが稀ではない。だが、そんなことはまったくない。実際は、その初期に短期間の過渡期があつて、この時期には大学の教育水準低下について語りうるだけの根拠が存在した。だが、まもなく一八九〇年代末には状況は安定し、一九〇〇年から一九一〇年のユリエフ大学が一八七〇年代から一八八〇年代のデルフト大学にひけを取ったということはあるまい。世界的に知られた少なからぬ学者らがここでは働いていた。例えば、優れた地震学者で電気力学地震計の発明者であるボリス・ゴリツインや、彼の後継者で、光エネルギーを力学的作用に直接転換させる可能性（いわゆるサドフスキー効果）をはじめ、極めて理論的に証明したアレクサンドル・サドフスキーといった物理学教授らの名前を挙げておこう。化学講座では、氷の多型的変異を発見し結晶化理論を編み出したグスタフ・タンマンが一〇年間にわたって働いていた。

ロシア帝国の各大学がヨーロッパ大学システムに加わっていたことに疑いをさしはさむ余地がない以上、ユリエフ大学は、典型的なロシアの大学であるのと同時に、ヨーロッパの大学であつた。だが、問題は、一九世紀前半のデルフト大学がロシアの最良の大学の一つであり、ヨーロッパ大学の平均的水準より上にあつて、はつきりとした独自性をかちとっていたのたいして、一九世紀最末期から二〇世紀初頭のユリエフ大学は普通の、「平均的」で、おそらくはロシア帝国の「標準的」な大学であり、モスクワ大学やペテルブルグ大学には明らかに後れを取つていて、ヨーロッパの基準では、おそらく特に優れたところがなかつたということに尽きるであらう。

一九一七年から一九一九年の恐るべき出来事は、大学の運命をも大きく変えた。一九一八年、第一次世界大戦下でロシア的なユリエフ大学は存在を停止してヴォロネシに疎開し、そこでヴォロネシ大学という新大学の端緒となつた。ドイツ占領当局の創設したドイツのラントの大学 *Landesuniversität* が一セメスターだけ活動した。短い休止期間を

経て、一九一九年二月には、すでに独立を果たしたエストニア共和国の政権によってタルト大学は再開された。大学は純粹にエストニア的なものに転じた。教授言語はエストニア語であつたし、教授や学生たちも多くはエストニア人であつた。もつとも、自前の専門家が不足している以上、最初のうちはロシア人を含む外国人教師に頼らねばならなかつたのではあるが。タルト大学は、純粹にエストニアの高等教育機関に転じつつも、同時に引き続きヨーロッパ的の大学であつたわけで、この点に利のあつたことは議論の余地がない。エストニア人たちは初めて自分たちの土地、自分たちの母国に「自分たちの民族の大学」を得たのであり、自分たちの母語で学ぶ可能性を手にした。今初めて、タルト大学は眞の「エストニアの学問と文化の中心」となつた。だがそれでもこの大学は、かつてのデルフト・ユリエフ大学との一定の繼承關係を維持していた。そこには何人かのヨーロッパでもよく知られた学者がいた(たとえば、神経外科のルードヴィヒ・プーセップ)。この大学は実に良質のヨーロッパ的の大学であつたが、民族的な原則に力点が置かれていた。これは、東欧や北欧の大学に特徴的であつた。

プリバルティカ、そしてエストニアを含むヨーロッパにとつて二〇世紀は深刻な衝撃の世紀であり、これらの衝撃は、国内のすべて、国の相貌のすべて、そして人々の生活様式を時に激変させてしまつた。当然、それらは大学の運命にも反映した。一九四〇年夏、エストニアはソ連に併合された。大学の抜本的改組は第二次大戦後にすでに始まつていた。タルト大学は引き続きエストニア語を教授言語としたとはいへ、標準的なソ連的高等教育機関に変えられてしまわざるをえなかつたし、そこでは共産主義イデオロギーが支配して、いかなるものであれ「反体制的思考」は認められなかつた。この時期のできごとは、大学に痛みに満ちた打撃を与えた。教師たちの一部は一九四四年に西側に亡命し、一部は弾圧され、一部はブルジョア民族主義なる嫌疑で大学を去ることを余儀なくされた。「ソ連邦他地域から」若く高い技能を備えた要員たちが流入したことは、きわめて厄介であつた。それでも、この信じがたいほど困難な状況を大学は生き抜き、一九五三年のスターリン死去後は、急速に発展し前進していった。一九六〇年代から一九八〇年代にかけて、タルト大学は西側の学界との接触を確立しえた——総じてソビエト的状况下で可能な範囲で

のことではあるが——ソ連邦内の少数の大学の一つであった。ソビエト指導部や公式イデオロギーによって奨励されることのない学問研究も——これまたおそらく一定範囲内でのことではあるが——そこでは認められていた。この点で特に示唆的なのは、今や世界的に著名な人文学者のユリー・ロトマン（ちなみに、彼は私の師である）の構造詩学や記号論に関する研究である。彼の仕事は世界的に注目され、世界のすべての主要言語に翻訳された。ロトマンは外国の多くのアカデミー会員や世界記号論学会の副総裁に選ばれたが（ところが、ソ連のアカデミーでは選ばれていない）、外国に出ることは長く許されず、ソ連では彼の構想は認められなかった。それでもタルトでは、仕事を出版する機会が彼に与えられていた。ここにもまたもや、タルト大学の特質が現れていると私は思う。多少の誇張を交えて言うことができるとしたら、この大学はソ連邦でもっとも「西側の」な大学の一つだったのである。だが、再度言うなら、だからこそ比較的小規模なタルト大学が、ソ連邦で最良の大学の一つになったのである。このことは権力からも認められていた。高度技能を備えた専門家を養成するセンターであり、同時に、学術研究活動の中心として考えられたソ連邦内の七〇校の主導的高等教育機関にこの大学は含まれたのである。

これはどう説明すべきことなのだろうか。ここでもまたもや理由は多くあり、多様である。それらをすべて説明するとなると、あまりにも多くの時間を要するであろう。少しだけ述べておこう。ソ連邦の他共和国と比してよりリベラルなプリバルティカのあり方、これが一つの理由である。また、これはまるで偶然的要因のようであるが、この大学の叡知を備えた慧眼な指導者たち、まず第一に長く学長を務めたフョードル・クレメントの存在である。

だが、私が特に強調したい一つの契機がある。つまり、学問の歴史における伝統の意義であり、継承性の原理の意義である。伝統とは、複雑な現象である。単に伝統を繰り返し、盲目的にそれに従うだけであれば、これはずっと以前からわかっていることだが、なんら良いことはない。だが、同時に、伝統なくして学問の進歩はありえない。世界の学問のまったく同じ経験が示しているように、もつとも成功裏に発展しているのは、継承性と伝統の網の目を絶やすことがなく、同時に、こうした伝統がつねに更新されている学問中心地なのである。これは自然なプロセスであり、

そこではもちろん内部矛盾も生じかねないが、これはまさしく進歩の担保となる古いものと新しいものとの弁証法なのだというのが、特に重要である。

私は信じているのだが、タルト大学はまさに、一八〇二年以来、学問的伝統が途絶えることなく発展した幸福な事例なのである。一九世紀の最末期に教授言語がドイツ語からロシア語に変更になったことも、一九一九年にエストニア語が教授言語になったことも、そうした伝統を途絶させることはなかった。そこには独自の学問と学問追求と探究の精神が保たれていた。大学のロシア化であれ、「ソビエト化」であれ、こうした精神を根絶やしにすることはできなかった。本物の大学には、嵐や歴史の逆行に抗することを可能にしてくれる何か驚くほど生命力豊かな不屈のものがあるものなのだ。

あと私が述べておくべきことは、エストニア共和国の独立回復から一〇余年を経過し、エストニアの欧州連合加盟〔訳注・エストニアは、他のバルト諸国や東中欧諸国などとともに、二〇〇四年五月一日に欧州連合に加盟した〕から数ヶ月を経た今日のタルト大学がどのようなものか、この点である。

ソビエト的高等教育システムから現代のヨーロッパ的大学教育システムにいたる複雑な過程の一部をなしているこの大学の改組は、実は、いわゆる「ペレストロイカ」の末期、一九九一年八月のエストニア独立宣言以前に始まっていた。この改組は、かなり急速に一九九二年から九三年までに完了した。それが意味したのは、ソビエト的な課程制から科目制への移行、新たな学位制度、神学部の復活（一九九一年）、社会科学部の開設（一九九二年）、カレッジの創設、その他一連のタルト大学を西欧やアメリカの現代的大学に接近させる新たな試みである。

これ以上立ち返ることもないように指摘しておくが、今日わが国では、波罗ニア宣言にあわせてすでに最新の教育制度である三十二・四（学士課程教育・修士課程教育・博士課程教育）への移行は完了している。これは今や、あらゆる種の全ヨーロッパ的標準である。

今日エストニアには多くの——四〇校以上もの——高等教育機関が存在するものの、その大半は一部の専門のみを

そなえただけであるが、タルト大学はエストニア共和国で唯一、学部が一式そろった「古典的」大学である。そこでは二〇〇三／四年度に一万七六五名の学生が学んでいて、そのうち四三八名は三二カ国からの留学生である。大学には一一学部ある。神学部（最小学部で、学生数二四六名）、哲学部（最大学部で二八四九名）、医学部、法学部、生物・地理学部、物理・化学部、教育学部、体育学部、経済学部、数学・情報学部、社会科学部である。大学に附属して四校のカレッジがあり、うち三校はナルヴァ、パルヌ、テュリといったエストニアの小都市におかれており、四番目は、欧州連合から財政支援をかなり得たユーロ・カレッジで、これはタルト所在である。このほかに大学には、タリン所在の独立した法律研究所がある。通信教育を行ういわゆる「オープン・ユニヴァーシティ」もある。大学では一三〇〇名の教員と研究者が働いており、うち一三五名が教授である。日本語講師もいる。

大学には四つの博物館（動物学博物館、地質学博物館、芸術博物館、大学史博物館）と植物園（プリバルティカで最古のもの）、この上なくみごとな学術図書館がある。そこにはほぼ四〇〇万冊の図書と定期刊行物があり、多くの稀観書や価値の高い古い時代の学位請求論文のコレクションが含まれる。医学生教育用には「タルト大学病院」連合体も利用されているが、これは国内最大の医療センターである。

ヨーロッパの他大学との定期的な交換教授が実施されているが、アメリカやアジアとは少ない。毎年、講義を行うために諸外国から数十人の教授たちがやって来る。学生交流も定期化されている。例えば、二〇〇四／五年度には約五〇〇名のタルトの学生を外国大学に派遣することが計画され、逆に、タルトには約二〇〇〇名の学生が外国から来ることになっている。講義の一部は（ただし多くはない）英語で行われている。

今日のタルト大学の基本課題と特別の使命について論じられる際には、二つの契機が強調されるのが普通である。すなわち、タルト大学は、一方では「エストニアのナショナルな大学」であり、エストニアの文化と学問の中心であるということであり、他方で、この大学は現代の学問の水準に立ち、世界のすべての地域の大学と結びついた「国際的な学問中心地」であり、学問革新の中心地である、ということである。

現代のどの大学とも同じく、タルト大学は教育機関であることと学問研究の中心であることを一体的に担っていて、エストニア全体の「学術生産物」の半分以上（学術刊行物では六二パーセント）を生み出す最大のセンターである。その際、特に指摘しておくことが重要なのだが、タルト大学における学術研究の基本的方向が、世界中の学者ら
が注意を払う中心にあるもつともアクチュアルなものに向けられているということである。つまり、分子生物学、生物物理学、遺伝子工学、免疫学、レーザー医療、レーザー分光学、環境保護工学等である。ヨーロッパ学問中心地システムに入る高等学術センターがエストニアには一〇箇所あるが、そのうちの六研究施設がタルト大学で活動している。遺伝子工学センター、エコロジー・センター、人間行動・保健研究センター、物理学研究所、分子臨床医療センター、化学・材料学センターである。学術研究の成果を実際に生かしていくために、特別工学研究所も作られている。

タルト大学は、世界一四カ国の三〇以上の大学と協力協定を締結している。また、ヨーロッパ大学連合メンバーであり、プリバルティカの大学では唯一、いわゆるコインブラ・グループにも入っているが、これは歴史的伝統によってもつともよく知られ、国際的に認められた三九の大学の連合である。

タルト大学は現代のヨーロッパ大学システムにみごとに統合されているということ、そして、このシステムの不可欠の一部分となったということ、願わくば、皆さんがこのことに納得いただけたなら、と思う。実のところ、タルト大学はこれまでも常にその一部であり、このシステム中できほど大きくはないが——この大学はつねに比較的小さな大学であつた——、しかし独特のまたとない「顔」を備えてきたのである。

【訳者解説】

ここに掲載したのは、西洋教育史研究室主催により二〇〇四年一月二日に広島大学大学院教育学研究科・教育学部で行われた特別講義「ヨーロッパ大学史におけるタルト大学の位置と役割」の全文である。訳者である橋本が研究代表者を務める国際共同研究「エストニア・ラトヴィアにおけるロシア系住民の歴史と現状に関する総合的研究」（平

成一三〇一六年度科学研究費補助金・基盤研究(B)の一環として開催された国際シンポジウム「沿バルト——多文化空間のロシア人」(二〇〇四年一月三十一日、於・東京工業大学)のために招聘、来日されたエストニア共和国タルト大学名誉教授のイサコフ先生に特別講義である。

セルゲイ・イサコフ教授は、一九三二年、エストニア北東部の都市ナルヴァで生まれた、エストニア国籍のロシア人である。一九四九年、タルト大学歴史文献学部ロシア語ロシア文学科に入学して、一九五四年にはこれを優秀な成績で卒業、その後、一九九七年の退職まで、同大学で一貫して学究生活を送ってこられた。ウンベルト・エーコとならんで世界的にも著名な記号学者にしてロシア文化史家のユーリー・ロトマンの薫陶を受け、その弟子としてあるいは同僚として、エストニアにおけるロシア文学史・文化史研究の中心の座を占められ、一九八〇年以降はロシア文学科主任教授等の要職にあつて活躍されてきたのである。ソビエト期の業績には『一八〇—一九世紀エストニアの教育機関におけるロシア語・ロシア文学』(全三巻、一九七三—七四年)、『一八六〇年代ロシアの出版物における沿バルト地域問題』(一九六三年、准博士学位請求論文)、『一九世紀エストニアのロシア文学』(一九七四年、博士学位請求論文)をはじめとして、ロシア帝国時代のエストニアにおけるロシア人・ロシア文化問題やエストニア—ロシア関係史に焦点化した多数の著作や論文を執筆し、この研究分野の創始者・第一人者として知られている。その間、一九八三年から八六年まではフィンランドに在任してヘルシンキ大学で教鞭をとられたほか、ロシア、イタリア、ラトヴィア、リトアニアその他の旧ソ連諸国でも講義を行っておられる。さらに、帝制期のタルト大学(デルプト大学、ユリエフ大学)史に関連する論文も多数執筆され、帝制期ロシア教育社会史を専攻する訳者がはじめてイサコフ教授の知遇を得たのは、もっぱらこの方面を契機とするものであった。特別講義は、こうしたイサコフ教授の大学史に関わる知見を包括的に述べられたものなのである。

他方、一九九一年のソビエト連邦崩壊後イサコフ教授は、研究面では帝制期から戦間期の独立エストニア共和国時代を対象を移して、この時代のエストニアにおけるロシア人マイノリティの文化運動に関わる一連の歴史研究を推

進し、その成果を多数の論文と二つの著書、すなわち『エストニアにおけるロシア人 一九一八〜一九四〇年 文化史概論』（タルト、一九九六年）および『エストニア共和国のロシア系民族マイノリティ（一九一八〜一九四〇年）』（タルト、サンクトペテルブルグ、二〇〇一年、編著書）として発表した。ここでは、教授の持ち味ともいべき史料への嗅覚を活かしたアーカイヴでの忍耐づよい入念な資料調査に基づきながら、この時代にエストニアの地でロシア系住民の繰り広げた多様な文化的活動の詳細が再現されている。しかもこうした教授個人の手になる一連の業績のみならず、上記編著書をはじめとして現代のエストニアないしバルト三国のロシア人文化研究の組織化を進めていることにも注目しておく必要がある。現在のエストニア共和国におけるロシア文化運動の支柱の一人とも言うべき存在なのである。

こうした文化史研究上の諸業績に加えてイサコフ教授はエストニアの国内政治にも関与しており、一九九五年から一九九九年にかけてエストニアの国会議員に選出されている。議員時代には、ロシア系住民の組織した政党であるエストニア統一人民党に属して主として文教分野で活動するとともに、バルト議会連合メンバーにも選出されている。また、欧州国際機関からロシア系住民の処遇是正を迫られるなか、民族的少数者のエストニア社会への統合促進を目的に設置された統合基金理事に選ばれ、ロシア系住民を代表してその利益擁護のために活動する政治的役割を期待される立場にあった。ただし、国会議員としての経験は教授にとつて決して愉快なものではなかつたらしく、すでに一期のみで引退され、目下は、現役教授時代に勝るとも劣らぬ活力をもつて、エストニアで活躍したロシア人知識人に関する執筆活動に取り組んでおられる。最近著『音の魔術師——歌手ドミトリー・スミルノフとエストニア——』（タリン、二〇〇四年）は、エストニアにおけるロシア文化の伝統を掘り起こして継承することによりロシア人のアイデンティティ維持とエストニア・ロシア人文化なるエストニア文化中のサブカルチャーの創造をはかろうとする、文化的・学問的であると同時に政治的でもある教授の目下の活動の一端を伝えるものである。こうした自身の文筆活動の意味をより明示的に語つたものとしては、橋本伸也訳「エストニアにおけるロシア人文化の未来についての思索」、『エ

ストニア・ラトヴィアにおけるロシア系住民の歴史と現状に関する総合的研究——欧州統合と多民族社会形成に関する同時代史的視点から——』（研究代表者・橋本伸也、科研費報告書、二〇〇五年）がある。

さて、池端次郎名誉教授の訳出されたステファン・デイルセー『大学史』（上・下、東洋館出版社、昭和六三年）にもリヴォニアのドルパート大学として登場するこの大学のだどった数奇な歴史については、訳出した特別講義があまりとところなく語っているとおりであるが、それにくわえて、すでに何点かの日本語による紹介や研究論文が発表されてきた。それらを掲げるならば、以下の通りである。

今村芳「アレクサンドル一世の教育改革とG・v・パルロット」『早稲田大学大学院文学研究科研究紀要（別冊、哲学・史学編）』第一号、一九八四年。

今村芳「一八〇二年のデルプト大学の創設——帝政ロシア教育史への一考——」『北欧史研究』第三号、一九八四年。

今村芳「C・C・ウヴァーロフの教育政策とバルト海沿岸諸県」『北欧史研究』第七号、一九八九年。

今村芳「G・F・v・パルロットとロシアの大学」、山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺——歴史論集——』ナウカ、一九九二年。

今村芳「デルプト大学における教授インスティトゥートの開設」『史観』第二二四輯、一九九一年。

橋本伸也「ロシアのなかのドイツの大学」『大学史研究』第一四号、一九九九年。

梶雅範「バルト科学史会議に参加して」『科学史研究』第II期、第四〇号（二二七）、二〇〇一年。

決して豊穡とは言えないにしても、関心を向けられることの少ない小国の大学史としては、それなりの蓄積があるというべきであろうか。それは、「暗黒時代」とさえ称される荒廃ぶりとは裏腹に、ヨーロッパ的大学ネットワークが中世的な圏域を越えて北欧・東欧へと拡張した初期近代に生を受けながらも、戦乱とロシアへの併合のなかで一

且消滅し、ロシア帝国が国家的規模で大学ネットワーク整備に乗り出した一九世紀初頭に再興、次いでロシア革命による帝国解体のなかで独立エストニアを代表するナショナルな高等教育機関となりながらも、ソ連への併合によってソビエト型大学に変貌させられ、ついに一九九一年の独立回復を契機にヨーロッパの大学に復帰したこの大学の運動が、近現代をいろどる「ロシアとヨーロッパ」という壮大な主題を貫く問題群を象徴的に提示しているがゆえのことである。ソビエト教育学やコメニウスへの突出的関心にもかかわらず、波乱に充ち満ちた中東欧地域の歴史の実像にはさほど眼を向けることのなかった日本の西洋教育史研究ではあるが、もしも、目下EU拡大のなかで再審の対象となつている「ヨーロッパ・アイデンティティ」の核としての大学や教育の歴史的役割を解き明かそうとするのであれば、あるいはヨーロッパ的な意味での知識や教育の世界システム化の相貌を解き明かそうとするのであれば、タルト大学やその周辺に存在した各種の教育機関はきわめて興味深い一事例を提供してくれるであろう。特別講義を主催するとともに、今回、その内容を訳出・刊行するのは、まさにそうした観点からこの小国の事例を紹介したいと考えたゆえのことである。

このように、ヨーロッパ大学史にかかわる観点からも、「体制移行と教育改革」という同時代的関心からも、きわめて興味深いエストニア共和国タルト大学の来歴について、概略的とはいえ読者になにがしかの興味を持つていただけたなら、訳者にとつてこれほどの喜びはない。